

# 震災活動報告

重井医学研究所附属病院 小児科  
特定非営利活動法人 ジャパンハート  
今村 昌司

この度、5月19日から25日まで、ジャパンハート（JH）を通じ、宮城県石巻市にある渡波小学校にて、診療活動に参加させて頂きました。

活動地などについては、以前の小川先生の震災日記 2 に書かれているものと同じでありますので、割愛させて頂きます。

被災地での、医療活動は、日に日に現状に変化があります。まずは、私が参加させて頂いた時の現状をお伝えします。

私は、渡波小学校の保健室の1画を診療所として使用している所に派遣されました。渡波小学校では被災直後は約1300人程、避難者がいたようですが、震災から2ヶ月以上過ぎ、私が参加させて頂いた時には329人でした。活動終了までにも避難者の数は減少傾向であり、25日には288人となっていました。

渡波小学校は、1階のほぼ天井までが津波で浸水し、今後は廃校になる予定とのことでした。



（渡波小学校）

保健室では4大学チーム（三重、岐阜、名古屋、富山大学）、日赤チーム（各県からの派遣、私が参加していた時は、高松日赤チームが参加）とJHチームが医療にあたり、それとは別に日赤の心のケアチーム、キャンナースというボランティア団体が被災者の心のケアに当たっていました。

医師 3～6 名、看護師 4～7 名、薬剤師 3～5 名、事務 2～3 名、心のケアなどに 10 名程度で保健室での診療を行っていました。

地元の開業医も徐々に復興してきており、6 月に入ると、大々的な編成が行われるとのことでした。我々が参加していた、渡波小学校の診療所も閉鎖されるとのことでした。



(保健室 診察室 1～3)

大まかな現状、診察体制などは上記の通りです。

参加後の活動内容などは下記に、日記様式にて記載します。



(復興まだままだの街並み 下は冠水している)

5 月 19 日 晴れ

JH からの指示でこの日は、19 時に仙台事務所に行くとのことであり、岡山を昼に出発した。新幹線で約 6 時間かけて仙台に到着。

まず驚いたのが、仙台駅周辺の様子、震災の影響など微塵も感じない。所謂大都市の様。

大荷物をもつ、私はやや浮いていた。

そこから、仙石線にのり、JHの事務所まで移動。

その日は、医師2名、看護師2名の新たな参加者があり、その人達と一緒に、事務所の方から、オリエンテーション（現在のJHの活動地は本吉と渡波である、今までの状況、現状等々）を受け、翌日は朝6時半出発とのことであつたので、早めに就寝した。

5月20日 晴れ

朝5時半起床、同室者の鼾が酷くあまり、寝られず。

予定どおり、6時半に車にて活動地の渡波地区へボランティアさんの車で移動。徐々に渡波地区に近づくにつれ、所謂TVで見るような被災状況がみえてくる。

仙台から、渡波まで、高速道路など使用したが、復興支援の車で大渋滞であり、普段は30～1時間くらいの距離に2時間かかった。

毎朝の定期ミーティングに参加し、10時～16時まで診療を行った。

初日は計49人の患者、内、小児は8人であつた。

粉塵が待っている影響で、喉に炎症を起こし、咳、鼻水などアレルギー症状呈す患者、高齢の方であり、高血圧の薬など定期処方患者、釘を踏む、犬に噛まれるなどの外傷の患者が多かつた。

滞在地は渡波小学校から徒歩5分にある、あいわグループホームの1室を無料提供していただいております、そこを拠点とする。

風呂、トイレ、ベッド完備であり、被災地とは思えぬ環境で過ごすことができる。

グループ代表の阿部さんには丁寧なお持て成しを頂く。

5月21日 雨のち晴れ

6時半起床にて、同じく、朝からミーティング参加後、診療開始。

全体で50人、内、小児科12人であつた。

この日は粉塵の影響などを調べているNHK仙台の取材が来ており、取材を受けることに、、、地元局であり、取材もたくさんしているとのことで、TVに出ることは無さそう。

心のケアチームからの申し送りでは、被災地での生活も長引いており、大人、小児ともに気分が沈んでいる人が多いとのこと。

内科、小児科、外科などの診察も大切だが、長期的展望で見ると、心のケアが今後課題となりそう。

5月22日 曇り後雨 風やや強く、肌寒い

6時起床にて、同様に活動。

全体で45人、小児は5人と少なめであつた。

徐々に開業医も開いてきているとの報告あり、元の生活に戻ってもらうためにも、少しずつ

つかかりつけ医を受診するように勧めることに。

5月23日 晴れ

6時起床にて、学校で行われている、班長会議（避難者の代表がその日の活動、問題点などを報告する会議）に参加。重要な報告として、満潮、干潮の時間を伝えていた。まだまだ、復旧が遅く、満潮時刻になると、近くの国道も冠水し、膝より上に水があふれる為。

その他、女優 渡辺えりさんが体育館に慰問にくるとのことであった。

体育館の周りの張り紙を見ると、俳優渡辺謙さんの写真などもあり、たくさんの方が慰問に来られているようであった。

その後は、同様に活動。

合計 48 人、小児 10 人であった。

5月24日 曇り

この日は、いつもどおりのミーティングのあと、石巻市の小児科医師会の理事をされている、地域の開業医の佐久間先生に、石巻市の小児医療の現状を聞き取りに行く機会があった。

もともと、石巻市（人口 16 万人程度）には大きな病院としては、石巻日赤病院、石巻市民病院があった。もともと、石巻日赤は 3 次救急病院であり、NICU も完備しているが、小児科医は 4 人。石巻市民病院は、小児の入院設備はなく、小児科医は 1 人、あとは、開業医が 6 件のみで回していた。

津波の影響で、石巻市民病院は全壊、開業医もこの日時点では 4 件しか開いておらず、もともとの小児科過疎に加えて、震災の影響で大変な、小児科不足である。

そこで、地域の小児科医が集まり、県、市にこの地区に休日夜間診療所を作り、今後の、夜間、休日の医療を整えようとする動きかけがあり、建設が決まったところであること。

県、市の医師が協力して、今後の小児科医療を支える予定だが、JH の活動を理解して頂き、今後も、定期的な支援をいただけると助かるとのことであった。

現在の活動が地元先生にも受け入れられており、安心した部分があった。

聞き取り後は、いつものように診察に戻る。

合計 52 人、小児 15 人であった。

5月25日 晴れ

いつものように起床し、10時から診療開始。

この日は、合計 43 人、小児 8 人であった。

この日は、テレビ朝日の取材が来ており、取材を受けた（同じくローカル局）。

この日に帰岡する予定であったので、14時までで、診療を切り上げ、新幹線にて帰岡した。

尚、最終日頃になると、だいぶ避難者さんとも仲良くなり、母や、班長さんなどから色々お話が聞けた。

小児の心のケアが必要と感じたケースがいくつかあったのでそれを列挙してみる。

**CASE1** 日中は母にべったり、夜になると、大啼泣し、睡眠リズムが崩れている 2 歳女兒

**CASE2** 夜から朝方にかけて、腹痛の訴えがあり、母から離れたくないため、幼稚園を休みたがる 3 歳女兒

**CASE3** 元々父から母へ DV がある家庭で、震災後は母もストレスが貯まり、児に DV をしてしまい、夜中にお腹を思いっきり蹴られてしまった 7 歳女兒（診察上は異常所見はなかったが、近く保護される予定とのこと）

**CASE5** 避難所で子供をまとめているリーダー的な児。本人は文句も言わず、涙も見せず頑張っていたが、ストレスが増加し、腹痛など不定愁訴の訴えをする 12 歳女兒

**CASE6** 津波被害で自分が助かってしまったことに自責の念があり、「僕もあの時死ねばよかった、死にたい」など発言のある 8 歳男児

最終日に少しお話を聞いただけで、以上のような CASE のお話を聞けた。

もっともっと介入していく必要性を感じたが、期限の決められた支援では効果は少ないと感じた。長期的な展望を持つての、今後のかわりが必要と感じた。



(JH スタッフ)

以上が活動報告です。

乱文で、読みにくい点が多くもうし訳ございません。

活動を通じて感じたことは、すでに急性期は過ぎており、今後の中長期的な支援や活動が必要、それには現在の活動を大きく見直す必要があるのではないかと言う事、被災者の自立を促す必要がある、特に年配の方が多地域であり、現状を受け入れる方が多い印象があったが、復興に向けて進まなければならないこと、田舎でもある為、躰には手を出すことはあたり前という地域性もある様だが、大人にももちろんストレスがかかっているのと同様、小児にもまたはそれ以上のストレスがかかっている事を認識すること、それを大人が長期的に解消していく努力が必要であり、その手助けが小児科医には求められていること、などです。

最後になりましたが、今回の活動参加を心から応援して頂いた、重井理事長、瀧院長先生をはじめ、諸先生方、スタッフの皆様には心より感謝申し上げます。